

W-BRIDGE

'10年度活動報告

10



W-BRIDGE

Waseda-Bridgestone Initiative for Development
of Global Environment



Message

地球環境保全のための「架け橋」を目指して

早稲田大学とブリヂストンが連携して進める「W-BRIDGE」は、環境問題という人類共通の課題に対し、産学連携に加え、環境 NGO や市民団体といった一般の生活者の方々にも参画いただき、三者一体で研究・活動を行える枠組みを提供するプロジェクトです。企業と大学の連携に、地域の生活者との連携をプラスして、二つの架け橋、つまりダブルブリッジに基づいた実践的な研究・活動を支援していくことを目的としています。

2008 年 7 月のスタート以来、のべ 40 件のプロジェクトを支援してきました。研究者と市民そして学生の間に架け橋をわたして、ともに地球環境を守るための研究・活動をすすめています。世界的な業績を上げた研究者や著名な NPO 活動者から、それぞれの地域で生活と環境を守っているみなさん、未来への希望に満ちた学生まで一緒に手を携えて行動をしています。ちょっと照れくさいですが、地球とみんなの「しあわせ」を目指して。

W-BRIDGE (Waseda-Bridgestone Initiative for Development of Global Environment) は早稲田大学環境総合研究センター内に設置された産学連携プロジェクトです。

株式会社ブリヂストンが定めた 4 つの領域

1. 地球温暖化対策と生物多様性保全のバランスを考える
2. 人々の生活と環境保全活動のバランスを考える
3. 次世代からの視点で目標を定め、効果的で効率的な環境改善手法を考える
4. 環境に関する情報を世界へ効果的に発信し、コミュニケーションする手法を考える

の中から 1 つを選んで、早稲田大学および早稲田大学の提携校等に所属する研究者と民間団体などの連名で応募いただき、助成審査委員会の審査を経た案件に対して、早稲田大学環境総合研究センターから研究・活動を委託しています。

また、研究・活動を支え、情報を発信する活動も併せて行っています。

2010 年 11 月 1 日現在、のべ 40 件のプロジェクトが採択されており、(うち 6 件はすでに目標を達成して終了) 対象地域もインドネシアから早稲田の町内会まで、研究代表者も早稲田大学、慶應義塾大学、茨城大学、山梨大学、国際研究機関まで、民間団体も海外の NPO から、商工会、地域団体、ジャーナリスト団体など多様な広がりを見せています。

(本文中の記載も 2010 年 11 月 1 日を基準としております。)

本レポートの内容は、W-BRIDGE プロジェクトの第二期の活動の概要を表したものです。詳細は、www.w-bridge.jp をご覧いただくか、W-BRIDGE 事務局(裏表紙に記載)までお問い合わせください。





下の背景写真：インドネシアでの植林予定地風景
（森川プロジェクト）
上にのせた5点：各々の活動風景
（上段左から、岩井、加藤、切川、
下段左から、秋吉、西尾、
の各プロジェクト）

ご挨拶

早稲田大学は、環境分野においては、理工学系と人文社会科学系が協働して問題に取り組むことが重要であるとの認識から、学問領域統合型のアプローチを旨とする環境総合研究センターを設置して活発な研究展開を行うとともに、大学院環境・エネルギー研究科を設置して、時代の課題に応えた大学院教育を展開して参りました。

株式会社ブリヂストンでは、企業理念におけるミッションの一つとして「地球環境の保全に貢献」を掲げ、かねてから経営の最重要課題の一つとして「環境経営活動」を積極的に実践して参りました。具体的には、生産事業所の環境負荷軽減、環境対応商品の開発・販売やリトレッド事業の展開等の本業での環境活動に留まらず、社会貢献的な活動を含め、網羅的で多様性のある「環境経営活動」をグローバルに展開して参りました。

そして双方は、日々深刻化する地球環境問題解決の道筋を明らかにするという、企業および大学の社会的使命を果たしていくためには、従来の企業と大学の連携の枠を超えた、人々の生活により近づいた取り組みが必要だと考え、当プロジェクトをスタートさせました。



地球環境問題は、人類、ひいては全ての生物に関わる問題であり、その解決のための研究は、地域に生活する人々を巻き込んだ実践的なものでなければなりません。本プロジェクト設立の意図は、生活者としての一般の人々にも参加していただけるような新しい枠組みを提供するということです。

W-BRIDGE は、地域で実生活に根ざした活動をされている人々や NPO や NGO と産と学とが、ともに課題解決に取り組んでいく、そういう三者連携の新しい枠組を提供することにより、地球規模の問題解決や持続型社会の実現に貢献していきたいと考えます。また、得られた成果は広く世の中に発信し、多くの方々に活用していただけるようにしていきたいと考えます。

皆様におかれましては、当プロジェクトの趣旨をご理解いただき、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

代 表 堀口健治
代表代行 堀尾正靱
副 代 表 平 田 靖



写真 左から順に
西尾プロジェクト2点
秋吉プロジェクト
加藤プロジェクト
岩井プロジェクト2点



「地球規模の多様な 環境問題解決の架け橋」

（地球温暖化対策と生物多様性保全等の連携の
道筋を開拓）

この領域は地球温暖化対策と生物多様性保全のバランスを考えることを目的としています。

荒廃地における森の再生

＜研究・活動名＞荒廃地の緑化によるCO₂吸収とバイオ燃料生産の実証的研究

＜代表者／団体＞早稲田大学人間科学学術院教授 森川 靖

（財）国際緑化推進センター

世界的に、通常の植林活動では地域住民の継続的な便益がなく、植林地が持続しない例が多いなどの問題点が明らかになっています。

そのため、2009年1月にスタートした本プロジェクトでは、これまでのインドネシア・ロンボク島で経済面・環境面から最適な荒廃地利用システムの提案等を行ったという成果を踏まえて、インドネシア・南カリマンタンに活動の重点を移し、生物多様性に配慮した森林修復（緑の回廊）と環境教育などを展開しています。これらが、農耕困難な荒廃地の緑化、地域住民への持続的利益、環境教育に広く普遍化され、他プロジェクトを実施する際の具体的な指針となると期待しています。インドネシア国内の有力紙にも紹介されるなど、地域の期待も高まっています。（2009年1月より半年に1回の審査を受けて継続中）

伝統農法と市場を結び付け、生物の多様性を保全

＜研究・活動名＞Eco-certified Natural Rubber from Sustainable Agroforests
in Sumatra, Indonesia

＜代表者／団体＞World Agroforestry Centre（ICRAF、国際機関）

Dennis P. Garrity, Director General

Komunitas Konservasi Indonesia-WARSI

ジャングル・ラバーから産出されたエコ認証つき「dark green rubber」は、環境にやさしいグリーンカー（エコ自動車）を中心とした潜在的な需要が見込まれるため、エコ認証の定着と活用によりスマトラの小規模ゴム生産者に経済的なインセンティブを付与し、絶滅の危機に直面している伝統的農法であるジャングル・ラバー農園の生物多様性保全を試みました。

インドネシアジャンビ州において実施。

（2010年6月で終了）



写真 上左：ナンヨウアブラギリの種子
 上右：住人要望ヒアリング
 中央：アフリカ・ブルキナファソで行なった
 バイオマス測定の実習
 下左：インドネシア・ロンボク島の調査地
 （全て森川プロジェクト）

（第1領域 つづき）

持続可能な国内森林利用の方向性を探る

＜研究・活動名＞地球温暖化対策を念頭においた総合的な森林利用の方向性を探る研究

＜代表者／団体＞慶應義塾大学大学院政策メディア研究科教授 金谷年展
NPO 法人バイオマス産業社会ネットワーク

我が国の森林は、その多くが人工林であり、森林利用が適正になされてこそ、生物多様性も保たれ、地域の豊かさにつながります。

本活動では、森林利用活動の阻害要因とその改善方法について明確にし、広く公開することによって、多くの関係者に問題の要点が理解され、マスメディアでの報道を促すことにより、日本の森林政策の流れを変え、企業、地域、行政が協力しあいながら、森林利用を進めていくことができる方向性を提案しています。

（2009年7月より半年に1回の審査を受けて継続中）

写真 左：ロンボク島西部の田園風景
（森川プロジェクト）

右：研究発表会
（金谷プロジェクト）



W-BRIDGE へのメッセージ



「環境はすべからく地域の問題である」といわれます。世界、日本の各所とそれぞれに異なった様相で、環境的課題が生まれます。ですから真の問題解決は、地域で地域の住民によってでしか達成できません。最近になって従来型の、分野で区切られ、その中での精緻化を求める従来科学の反省として Sustainability Science の考え方こそ社会における科学の新しい方法であるとの流れが出てきており、将来主流になると考えられています。

W-BRIDGE プロジェクトは、まさに今の世界で養成される科学を実地に進めるものとして大きな意味をもつものです。大学の知と住民の行動の組み合わせで社会改革をボトムアップで実践するというユニークな試みを見守っていきたいと考えています。

国立環境研究所特別客員研究員 西岡秀三さん

W-BRIDGE のロゴデザインを拝見したところ、このWとBの間に秘かに二重橋がかかっていることに気づきました。この二重橋の意味が相当に大きいことなのではないかと思われ、素晴らしいプロジェクトになり得るのではないかという期待感を持っています。

ブリヂストン、早稲田大学といった世界的に著名でそれぞれの歴史を持つ、この両者が協働した横断的なプロジェクトで、かつ市民の方々も引き込んでいくという壮大なプロジェクトということにも、驚きを隠せません。

W-BRIDGE で取り組む環境問題は、まさに多様性に富んだものであって、理論・研究だけでなく一つ一つの実践がベースになるものだと思います。市民の方々も交えるということで、企業と大学の連携が、一人一人の生活者の中に何か芽生えるものになっていくようなプロジェクトになることを期待しています。

(株)NHK エンタープライズ エグゼクティブプロデューサー
松尾典子さん



アドバイザー・ボード

W-BRIDGE には本プロジェクトの趣旨にご賛同いただいた各界の専門家から構成されたアドバイザー・ボードが設置されています。研究領域・研究成果に対して随時助言をいただき、活動内容に反映しています。

(敬称略、五十音順)

- 池上清子 (環境と開発途上国問題の専門家)
- 大橋 力 (文明科学研究所長 / 芸能山城組主宰)
- 小畑秀文 (東京農工大学長)
- 白井克彦 (早稲田大学総長)
- 西岡秀三 (国立環境研究所特別客員研究員 / IPCC メンバー)
- 原 剛 (早稲田環境塾塾長)
- 松尾典子 ((株)NHK エンタープライズ エグゼクティブプロデューサー)
- 三村信男 (茨城大学教授 / IPCC メンバー)
- 渡辺弘之 (京都大学名誉教授)



「いかしつつ守る環境活動者のグローバルな架け橋」

(持続的な人間活動と環境保全活動にかかわる人々の共通の理解と連帯の形成)

この領域は人々の生活と環境保全活動のバランスを考えることを目的としています。

ごみの島から「人のつながり」の島へ再生

＜研究・活動名＞瀬戸内海・豊島をモデルとした自然環境・地域再生研究プロジェクト

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科助教 切川卓也
豊島学（楽）会

戦後最大級の不法投棄事件が発生した瀬戸内海の“豊島（てしま）”をモデルとして、自然環境と地域再生に焦点を当てた研究を展開しています。

島が本来の姿で活力に満ちた姿を取り戻し、かつ自然の回復が併せて行われることを目的として、主に地域産品流通システム、市民活動型の簡易環境計測システムの開発、豊島共創グリーンマップシステムの構築を目指しています。

本プロジェクトは、今年度の「市民が創る環境のまち“元気大賞 2010”」特別賞に選出されるなど、期待が高まっています。

(2009 年 1 月より半年に 1 回の審査を受けて継続中)

大学と地域と農のネットワーク

＜研究・活動名＞学生と地域市民で取り組む地域バイオマス活用による循環型社会の研究・実践

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 紙屋雄史
NPO 法人早稲田環境市民ネットワーク

地域の里山や農業の課題に大学が取り組むことで、新しい地域との関係創造につながる社会モデルを構築するために、埼玉県本庄市の大学キャンパス周辺に実習農場を整備し、地域のバイオマスを活かした農業を実践するとともに、実験的なエネルギー作物の栽培や、地域の希少種の保全などに活動に学生の参加、環境教育の機会を提供しています。今年度は、特に地域における生物多様性に関する市民モニタリング手法の開発なども進めています。

(2009 年 1 月より半年に 1 回の審査を受けて継続中)

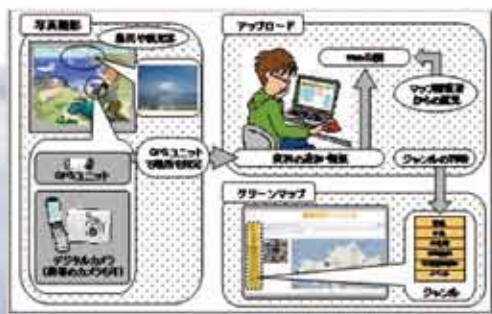
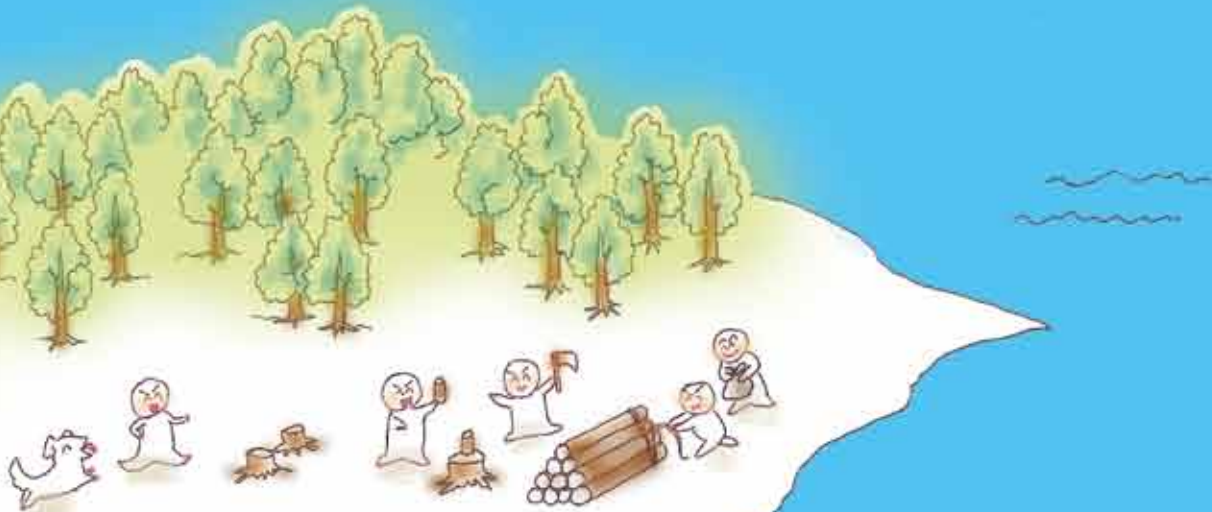


写真 上左：グリーンマップシステムの概要
 上中：豊島の外観
 上右：地域活性のための惣菜販売所・うらら
 （全て切川プロジェクト）
 下左：移動図書館
 （田村プロジェクト）
 下右：千箇こきによる脱穀
 （紙屋プロジェクト）



森を考えるプロジェクト

「荒廃地における森の再生」(p5)

「持続可能なジャングルラバー」(p5)

「森林政策を考える」(p7)

※ プロジェクト名は略称です。
詳しくは各ページをご覧ください。

<新規プロジェクト>

やんばるの森 (p14)

天然ゴムの持続的安定生産 (p14)

ごみと海(湖)を考えるプロジェクト

「地域の人々と学生の交流からごみ問題を考える」(p19)

「ゴミの島から『人のつながり』の島へ再生」(p9)

<新規プロジェクト>

「トキの生育環境保全」(p14)



W-BRIDGE
プロジェクトマップ



世界への情報発信を考えるプロジェクト

<新規プロジェクト>

- 「環境日本学の世界への発信」(p 19)
- 「文明と環境に関する知の対話」(p 19)
- 「熟議とファシリテーション」(p 14)



都市環境／環境経営を考えるプロジェクト

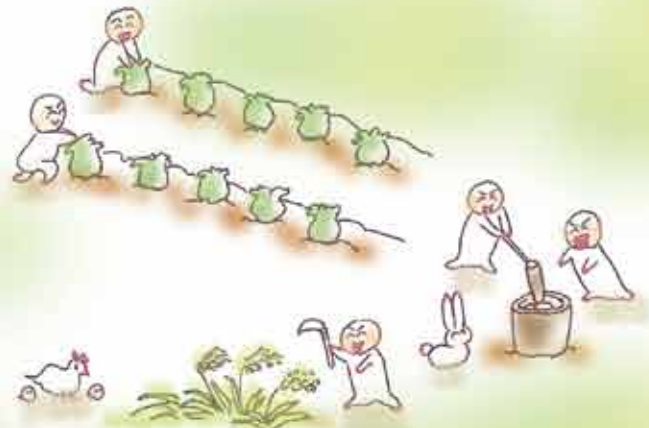
- 「地域住民と共に創るサステナブル都市新宿」(p 15)
- 「学生が未来のエコビジネスを開く」(p 15)
- 「排出量取引研究」(p 16)

<新規プロジェクト>

- 「企業 CSR と地域交流」(p 18)
- 「女性から見た環境・社会貢献活動」(p 18)

地域連携／農を考えるプロジェクト

- 「大学と地域と農のネットワーク」(p 9)
- 「じょんのびプロジェクト」(p 17)
- 「いばらきエコネットワーク」(p 13)
- 「農と食と緑」(p 13)



（第2領域 つづき）

地域で取り組むいばらきエコ・ネットワーク

＜研究・活動名＞地域連携で生み出すいばらきエコ・ネットワーク STEP2

（ネットワークからコミュニティへの展開）

＜代表者／団体＞茨城大学地球変動適応科学研究機関（ICAS）准教授 田村 誠

城里町商工会、筑西市商工会エコの木プロジェクト部会

城里町商工会と筑西市商工会が地域取り組みの実施主体となり、茨城大学はそれらを人と技術でつなぎ、サステイナブルな知識を財産として共有し伝承することを目的としています。

現在、エコ・ショップやエコの木プロジェクトなど各種のユニークな事業が展開されており、「生活者」が生き生きと展開させる「コミュニティ」とその有効性を科学的な視点での検証が進められています。

（2009年7月より半年に1回の審査を受けて継続中）

農林業体験を通じて若者への環境問題を提起する

＜研究・活動名＞農林業体験を通じた若者への環境問題提起

～食行動変容からの検証～

＜代表者／団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 秋吉 恵

WAVOC「農と食と緑の学校 in おけら牧場・ラーバンの森」

今後の社会を担う学生には、実際に農山村に行き、日本の農業や食、雑木林の役割や環境問題を現場から考えるとともに、「都市と農村」「中央と地方」の関係性を読み解くことのできる視野が必要となります。学生を主体として、農業の現場での作業を通じて食の生産過程に触れ、日々の自分たちの消費行動を見つめ直し、また、里山の手入れや松林の手入れを通じて、雑木林の役割や環境問題を実際の森づくりの現場から考える活動を実施しています。

今年度からは、食行動変容からの検証からといった側面をくわえて、研究・活動の充実を図っています。

（2009年7月より半年に1回の審査を受けて継続中）

右ページ写真 上：環境整備作業（島谷プロジェクト）
中：やんばる国頭の森と海（桑子プロジェクト）
下：草刈機の指導（秋吉プロジェクト）



★第2領域の新規採択案件

以下の4つの研究・活動が2010年7月から新たにスタートしています。(生物多様性を重視する地域活動)

○新潟県佐渡市トキ舞う加茂湖の水辺再生プロジェクト
(九州大学大学院工学研究院環境都市部門教授 島谷幸宏／佐渡島加茂湖水系再生研究所)

○やんばる国頭の森の持続可能な森林資源管理に関する研究
(東京工業大学大学院社会理工学研究科・価値システム専攻教授 桑子敏雄／NPO法人 国頭ツーリズム協会)

○中国における天然ゴムの持続的安定生産に関する研究・活動 ―生物多様性および環境経営・政策的視点から― (富山県立大学工学部・教養教育教授 佐藤幸生／雲南省昆明植物園)

○環境問題解決のための「場」作り実践の分析－「熟議」と「ファシリテーション」
(早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 友成真一／re:connect－人と人、人と自然の“つながり”を育む存在となる－(早稲田大学OB・学生団体))



「たしかな未来への たしかな架け橋」

(中長期目標設計とバックキャストिंग手法によるアクション設計)

この領域は、次世代からの視点で目標を定め、効果的で効率的な環境改善手法を考えることを目的としています。

地域住民と共に創る「サステナブル都市新宿」

＜研究・活動名＞“早稲田発”サステナブル都市「新宿」における地域共創型の温暖化対策推進に関する実証研究

＜代表者／団体＞早稲田大学環境総合研究センター准教授 小野田弘士
新宿区エコ事業者連絡会

都市部における温暖化対策の具体的な方法論をモデル的に提示することと、早大生をはじめとする地域市民のエコマインドを醸成し、率先実践型の人材を社会に輩出する基盤の構築を目標に、新宿区エコ事業者連絡会、早稲田大学の学生が、早稲田大学が保有する省エネ・省CO₂技術を活用して大学構内の自販機改良とその活用を中心に省エネ・省CO₂活動を進め、その手法の研究を行っています。

(2009年1月より半年に1回の審査を受けて継続中)

学生が未来のエコビジネスを開く

＜研究・活動名＞環境とビジネスのバランスを感受した学生を輩出するための研究・活動

＜代表者／団体＞早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 西尾哲茂
早稲田大学学生環境 NPO 環境ロドリゲス em factory

環境配慮型のビジネスモデルの構築や、環境とビジネスのバランスを感受し、実感と考え方を持ち合わせる学生人材を輩出することを目指し、全国学生環境ビジネスコンテスト em factory 2010 の開催や若い人をターゲットにした環境感受性の分析を行いました。

(2009年1月より半年に1回の審査を受けて継続中)



写真 上左：早稲田オリジナルの消灯中シール
 上右：新宿区ビジネスセミナーにおける展示
 （小野田プロジェクト）
 下：全国学生環境ビジネスコンテスト
 （西尾プロジェクト）

排出量取引が企業や地域に与える影響を探る

<研究・活動名> 排出量取引が企業の環境経営及び企業価値形成にもたらすインパクトに関する実証的研究

<代表者／団体> 山梨大学大学院医学工学総合研究部准教授 長谷川直哉 日本感性工学会価値創造部会

排出量取引が地域経済や企業システムにもたらす影響について、(1) (2) を中心に、地域との関連性を重視しながら研究を実施しました。

(1) 欧州域内の排出量取引制度の実態を踏まえ、国内および東京都の排出量取引制度の参加主体となる大企業および中小企業の経営行動の変化を実証的に分析し、企業経営における排出量取引の意義と課題を解明する。

(2) 東京都および山梨県の中小企業を対象に排出量取引に対する認識や経営行動にもたらす影響を調査し、サステナビリティ社会の実現に向けた社会経済システムの転換プロセスにおいて排出量取引がもたらす効果を推計する。

(2010 年 6 月終了)

(第3領域 つづき)

学生が担う地域活性化と環境保全

＜研究・活動名＞学生ボランティアと地域活性化による環境保全の連携に関する研究と実践

＜代表者／団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター研究助手 加藤基樹
WAVOC まっだい早稲田じょんのびプロジェクト

新潟県十日町市を拠点に、次世代から要請されるボランティア・交流の形を模索しつつ、より多くの大学生に活動をアピールしていき、最終的には次世代への活動の継承について、幅広い年齢層の参加が可能なシステム構築の検討を研究テーマとしています。

地域と密着した冬季の雪かき支援、棚田米づくり、菜の花プロジェクト、地域の人々とともに創る広報誌などを通じて成果が上がっています。

活動内容や方法の精査だけでなく、学生が責任者となるプロジェクトに一般の方を引き入れる場合の問題点を具体的に検証することで、次世代に必要な農村活性化や交流、ボランティア活動への提言として提示することができ、今後のあり方に様々な示唆を与える結果を提出できると期待されています。

(2009年7月より半年に1回の審査を受けて継続中)



写真 上左：一人暮らしのお年寄への昼食作り

上右：2010年秋収穫

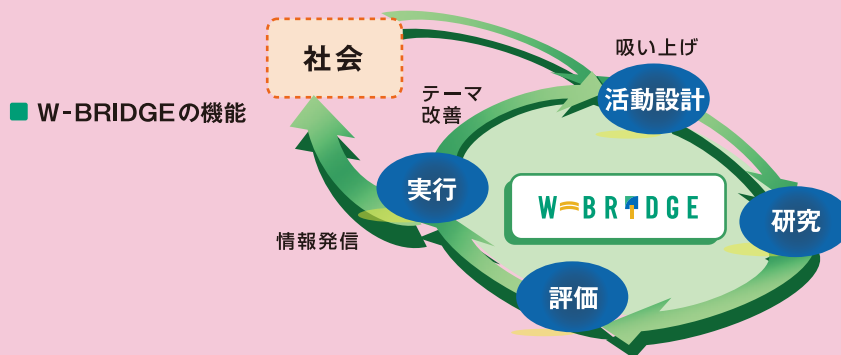
下：雪おろし

(全て加藤プロジェクト)

ハイレベルの情報を世界へ発信していく

代表代行 堀尾正鞠

環境や地球温暖化対策に向けたこれまでの取り組みでは、専門家による環境観測やデータ解析、あるいは先端的な技術開発だけが重視される傾向がありました。これからますます重要になるのは、問題解決のために、適正な技術を選んで、生活や社会の仕組みを総合的に作り直していくような、市民・大学・産業界の連携した研究や実践活動を作り出していくことでしょう。W-BRIDGE プロジェクトはまさにこの部分に重きを置いたものです。これからは、石油漬け社会からの脱却を目指し、W-BRIDGE の総力を挙げて、分野横断の学術・啓発誌「BRIDGE」の発行など、ハイレベルな情報を世界に発信する取り組みを進めたいと考えます。



ブリヂストンがW-BRIDGE に期待すること

株式会社ブリヂストン 環境推進本部長 平田 靖

W-BRIDGE では企業単独の環境活動あるいは特定の技術開発等狭い範囲の産学連携では決して得ることの出来ない成果をともに追求していきたいと考えています。産と学の視点だけでなく、生活者や地域の視点を重視した活動の推進に積極的に参画することにより、当社としても様々な要素を吸収し、ゴム農園と生物多様性のバランスといった課題、環境活動を推進するための指針や仕掛け作り等、環境経営活動に活かしていきたいと考えています。

★第3領域の新規採択案件

以下の2つの研究・活動が2010年7月から新たにスタートしています。

○企業のA-EMSとCSR-MSによる地域交流と健康増進（早稲田大学大学院環境・エネルギー研究科教授 黒澤正一／NPO法人栄村ネットワーク（長野県））

○女性生活者からみた環境・地域貢献のあり方に関する研究 ～地域版環境ベルマークへの基礎研究～（大阪市立大学大学院創造都市研究科准教授 永田潤子／NPO法人中部リサイクル運動市民の会）



第4領域

「地域と世界を生き生きと つなぐ環境情報の架け橋」

(環境情報の世界発信を通じた日本および各地域
の共時的精神空間の形成)

この領域は環境に関する情報を世界へ効果的に発信し、コミュニケーションする手法を考えることを目的としています。

地域の人々と学生の交流からごみ問題を考える

＜研究・活動名＞マレーシア移民集落における衛生環境改善のための環境認識研究
と学生ボランティア活動

＜代表者／団体＞早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教 岩井雪乃
WAVOC 主催「海外ボランティアリーダー養成プロジェクト（ボルネオ）」

マレーシア・サバ州・コタキナバル市において、急増しているフィリピン人移民集落でのゴミ堆積問題に対して、その改善のため4つの研究・活動を行っています。

- ①民族固有のゴミを含む環境認識のあり方及びゴミに対する行動選択の過程の解明
- ②ゴミ問題の改善を通じての移民集落の衛生環境と海岸環境の向上
- ③ゴミ問題に対する協働を通じてのサバ人と移民の関係改善
- ④マレーシアでの活動体験から「幸せ」を問いなおすメッセージを日本社会に対して発信

本プロジェクトは、NHKでも活動内容が放映されたり、学生OBを巻き込んだ各種活動が派生するなど、大きな期待と注目を浴びています。

(2009年1月より半年に1回の審査を受けて継続中)

★第4領域の新規採択案件

以下の2つの研究・活動が2010年7月から新たにスタートしています。

○地域社会との連携による環境日本学の創成とその情報発信システムの構築（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 天児 慧／日本環境ジャーナリストの会）

○W-BRIDGEの成果を踏まえた環境・文明・感性に関する知のリーダーの対話 ― 東洋的感性を世界に発信する（早稲田大学国際部・留学センター准教授 江 正 殷／文明と環境を考える会）

なお第4領域では、プロジェクト全体の情報発信機能を担うものとし、学術誌「BRIDGE」の発行準備をはじめ、さまざまな情報発信活動を実施しています。



写真 上 : マレーシアでの活動
 下右 : 現地主婦へのエコバッグ作り指導
 (全て岩井プロジェクト)
 下左 : 研究会風景
 (天児プロジェクト)



W-BRIDGE では、活動設計→研究→評価→実行のサイクルと社会への情報発信を万全なものとするために、下記の活動を行っています。

- ・ 効率的な個別研究のための情報の収集及びテーマ設定、評価指標の開発と評価実施
- ・ 個別研究委託の成果のとりまとめ支援
- ・ シンポジウム・研究発表等イベントの開催
- ・ 組織的な情報発信
 (公開講座、学術誌「BRIDGE」、研究レポート等情報発信体制の整備)

◆執行組織 (運営委員兼任)

代表	堀口 健 治 (早稲田大学副総長)
代表代行	堀 尾 正 毅 (早稲田大学)
副代表	平 田 靖 (ブリヂストン)
事務局長	永 井 祐 二 (早稲田大学)
研究マネジメントチームリーダー	岡 田 久 典 (早稲田大学)
研究員	中 島 勇 介 (ブリヂストン)

◆運営委員

永 田 勝 也 (早稲田大学)
勝 田 正 文 (早稲田大学)
碓 井 俊 一 (ブリヂストン)





おわりに

W-BRIDGE ってどんなところ？

W-BRIDGE に出会ってから知らぬ間に
世界が広がっていました。

W-BRIDGE にはたくさんの宝物がつまっています。
笑顔、自然、生命、歴史、暖かさ

これらの宝物が人と人をつなげていき
それは世代を超えた深い絆を生み出していました。

環境に対する取り組みを通じて環境という存在の可能性
人間の可能性について触れることができました。
私たちの環境への取り組みではどうしようもできない
遠い存在であると思っていた場所へと連れて行ってくれました。
W-BRIDGE はまさに環境界の架け橋です。

今年も、W-BRIDGE からまかれた種は芽を出し
日光を浴びながら成長していき
やがて、それぞれが、未来へつながる立派な橋となっていくでしょう。



W-BRIDGE

「W」と「B」の間の二重線、ここに「二つの架け橋」の思いを込めました。つまり、産学の架け橋、そして、生活者との架け橋、の二つを表しています。また「I」の部分は、環境保全の代表的な対象である「木」のイメージ、そして青い部分が「地球」を表しています。私たちは、地球環境分野において、従来の産学という連携に加え、地球に生活している人々をも結ぶ二つの架け橋、名前の通りダブルブリッジになりたいと考えているのです。



写真 上から順に
 全国学生環境ビジネスコンテスト（西尾プロジェクト）
 現地小学校での環境教育（岩井プロジェクト）
 菜の花プロジェクトの畑（加藤プロジェクト）
 実習地での集合写真（秋吉プロジェクト）

W-BRIDGE

'10年度活動報告

20



2010 年 12 月 8 日 発行

発行 早稲田大学環境総合研究センターW-BRIDGE

〒162-0041

東京都新宿区早稲田鶴巻町 513

研究開発センター 3-102

TEL: 03-5292-3526 FAX: 03-5292-3527

E-mail: w-bridge@list.waseda.jp

URL: www.w-bridge.jp/

制作 W-BRIDGE

協力 松元貴志、西尾ゆかり

2010 Printed in Japan © W-BRIDGE